

3. 史跡指定地の調査

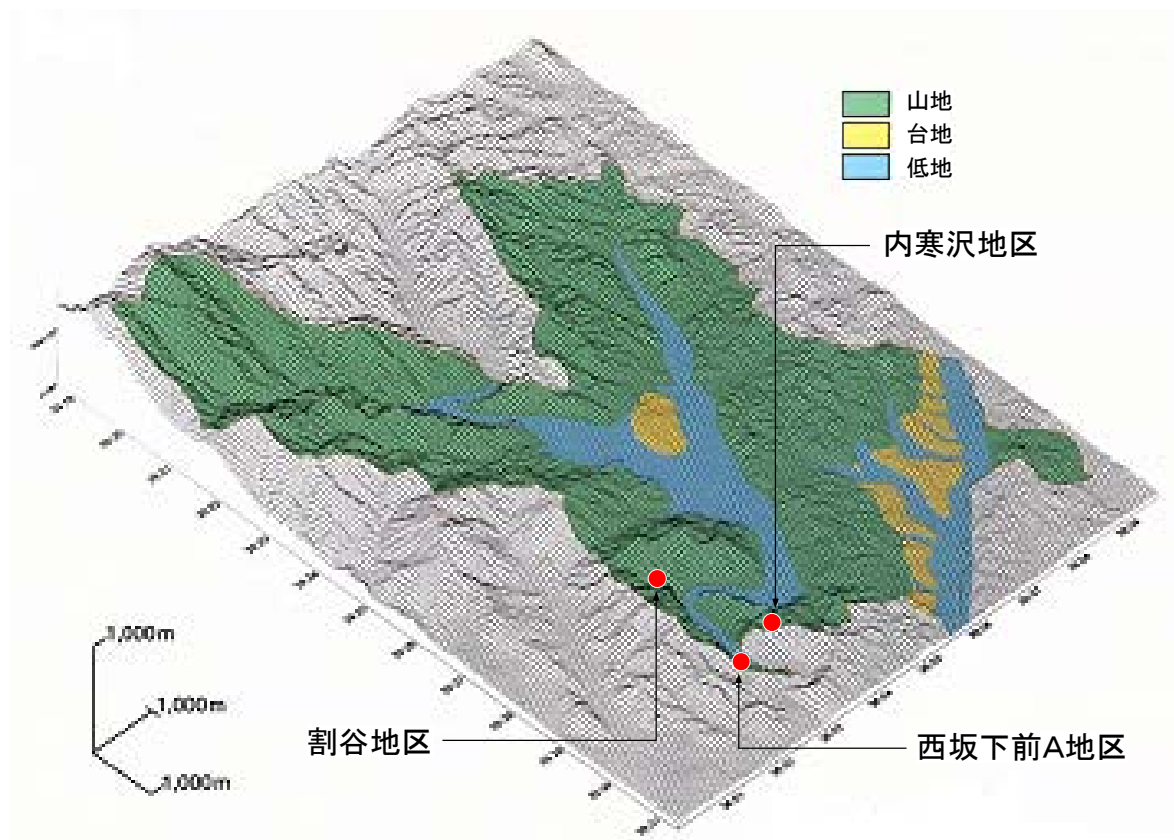
3-1 自然的調査

3-1-1 地形概要

下里・青山板碑製作遺跡が所在する小川町は、埼玉県のはぼ中央部を占める比企郡の北西部に位置し、北は大里郡寄居町、東は比企郡嵐山町、南は同郡ときがわ町、西は秩父郡東秩父村に接している。地形は、西側に外秩父山地の北東部に当たる堂平山（標高 875.6m）、笠山（標高 837m）、金勝山（標高 263.9m）等の山々が連なる山地、槻川や兜川に沿って形成された盆地状の谷底平地（小川盆地）、比企丘陵の西端に当たる市野川とその支流による開析が進んだ小谷地形の3地形に区分できる。

遺跡は小川盆地南側の仙元山の北東麓と南麓に東西に延びる二筋の緑泥石片岩の分布域に所在する。

■ 図9 小川町の地形鳥瞰図



(1999『小川町の自然 地質編』より)

3-1-2 地質概要

緑泥石片岩の分布

緑泥石片岩は、三波川帯を構成する広域変成岩のうちの結晶片岩である。小川町の三波川帯の変成岩は、片理が発達する下位の三波川結晶片岩と、変成度が低く片理の発達が弱い緑色岩からなる上位の御荷銕^{みかぶ}緑色岩類とに分けられる。小川町の三波川結晶片岩は関東山地の三波川結晶片岩の下部に相当し、泥質片岩に苦鉄質(※)片岩を挟み、少量の砂質片岩、石英片岩、紅レン石片岩などを含む。比較的変成度が高く(ざくろ石帯及び黒雲母帯)、点紋を生じている。

下里・青山地域では、ほぼJR八高線に沿って南北に走る前谷津断層の東側に三波川結晶片岩、同西側に御荷銕緑色岩類が分布する。三波川結晶片岩は黒色～灰色の泥質片岩(石墨片岩など)が広い地域を占めるが、緑色～淡緑色の苦鉄質片岩(緑泥石片岩など)が仙元山の北東麓と南麓に東西に延びる二筋の帯状に分布する。北東麓のものは北東ないし北へ10～30°傾斜し、青山地内見田地区から見晴らしの丘公園と仙元山の間を東へ延び、槻川を横切り下里地内北根地区北方の愛宕山へ至る。南麓のものは南へ20～40°傾斜し、青山城跡の西から東へ延び、割谷を経て槻川右岸沿いに西坂下前へ至る。これら二列の苦鉄質片岩(緑泥石片岩など)は、一枚の岩層が仙元山を通り西北西-東南東方向の軸を持つ背斜の北翼と南翼に現れたもので、同一のものである。

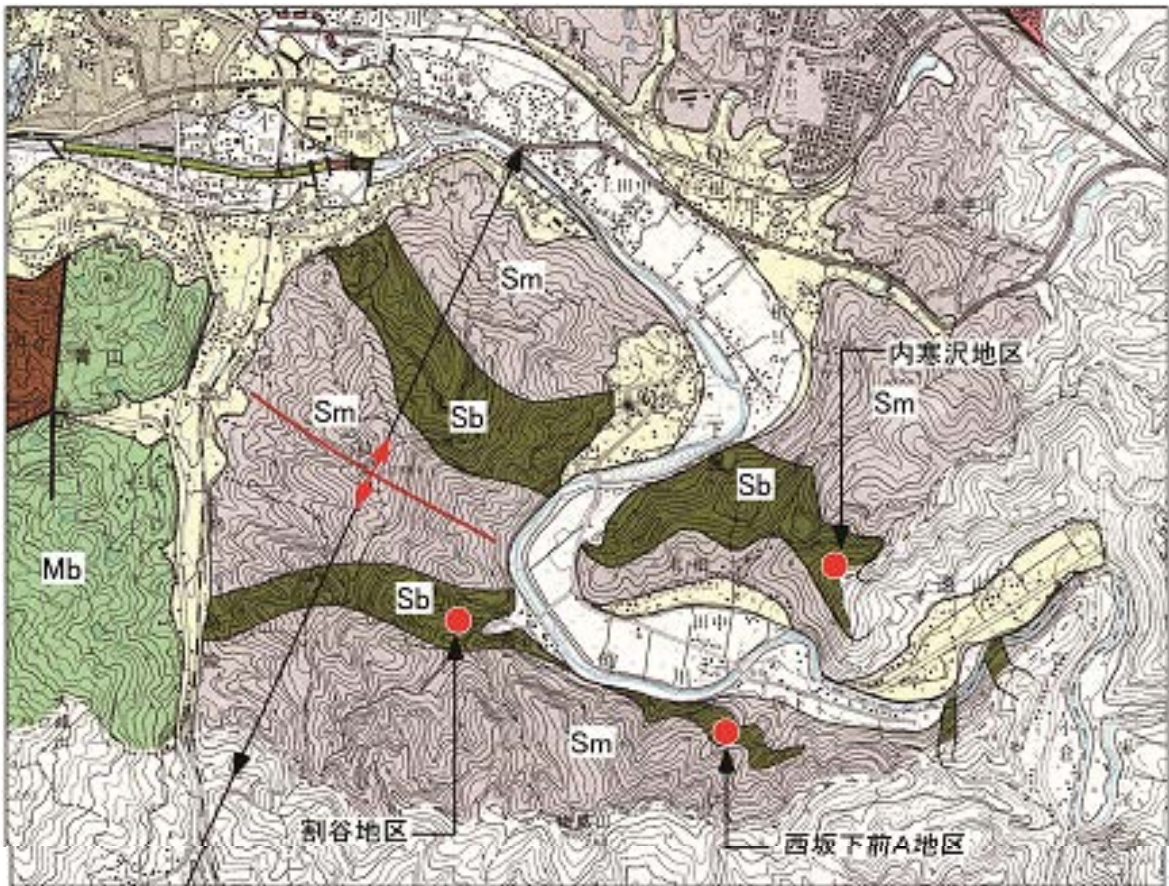
※苦鉄質…マグネシウムと鉄に富んだ性質。

緑泥石片岩の特徴

緑泥石片岩は、海底火山から噴出した玄武岩質の溶岩や火山灰が堆積してできた岩石が、地殻の変動で地中深くに沈み込み強い圧力を受けて変成したものである。そのときに受けた圧力によって、それらの岩石は再結晶して緑色の鉱物(緑泥石など)を作り出し、それが平面状に並んだことから、青緑色で薄く剥がれやすい性質(片理)が発達した。また、より変成度の高い緑泥石片岩には、曹長石の白い点紋(斑状変晶)が見られる。

緑泥石片岩はその青緑色から「青石」と呼ばれ、薄く剥がれやすく加工しやすいという利点から、縄文時代の石皿や石棒、石斧などの石器、古墳の石室や石棺、竪穴式住居の敷石やカマド補強材、中世の板碑をはじめ、石碑、墓石、石垣、石段、水路、橋、貼石、飛石、庭園など多くの用途を生み出した。

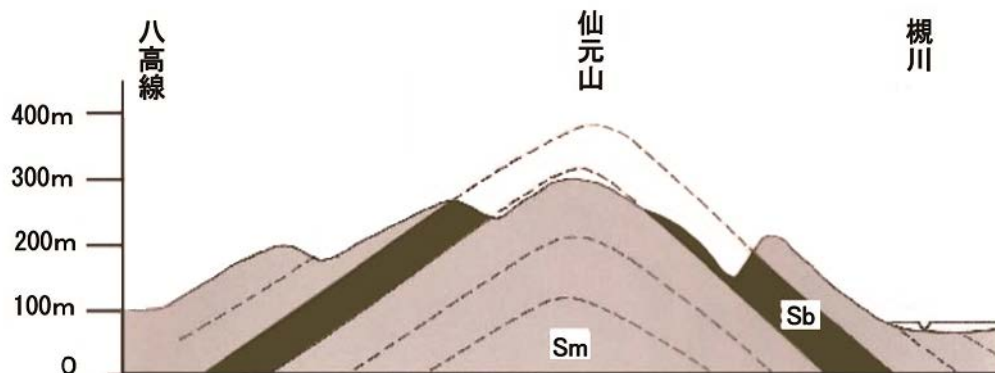
■ 図 10 地質図（緑色が緑泥石片岩を主とする苦鉄質片岩）と地質断面図



Sm: 泥質片岩 (石墨片岩など) Sb: 苦鉄質片岩 (緑泥石片岩など)

Mb: 御荷鉾緑色岩類

 背斜



(1999 『小川町の自然 地質編』 より)